

【論 説】

デモクラシーの危機 ——古代アテナイとペルシア戦争——

的射場 敬 一

目 次

はじめに

1. オリエン特世界の覇者ペルシア帝国
 - 1-1. オリエン特世界の興亡
 - 1-2. イオニア植民都市とオリエン特世界
 - 1-3. キュロスとペルシア帝国の抬頭
2. ギリシア世界とアテナイの勃興
 - 2-1. ポリスの形成と農民戦士
 - 2-2. アテナイにおける民衆の抬頭と政治闘争
 - 2-3. クレイステネスの改革
3. ペルシア戦争
 - 3-1. イオニアの反乱
 - 3-2. マラトンの戦い
 - 3-3. なぜ勝利できたのか

終わりに

はじめに

前490年のある日、アッティカ北部のマラトンの地で、アテナイとアテナイを支援するプラタイアの連合軍は、ペルシア軍と対峙する。ペルシアはイオニアの反乱を支持したアテナイとエレクトリアの膺懲ようちやうを口実こうじつに、ギリシアの国々を支配下に置こうと攻めてきたのである。ペルシアはエーゲ海の島々を征服し、7日間の攻城戦でエレクトリアを陥落させた勢いのままにマラトンの地に上陸した。マラトンの戦い（第一次ペルシア戦争）である。

その当時、既に古代オリエント世界（古代メソポタミア、古代ペルシア、古代エジプト、小アジア）を統一していたペルシアは、大王ダレイオス一世の下で、東は北西インドのガンダーラ、西はマケドニアにまでその版図を拡大させていた。まさに超巨大国家であった。ペルセポリス（現・イランのほぼ中央部に位置する）を首都としていたペルシアにとって、エーゲ海を取り囲むアナトリア半島西岸とバルカン半島（ギリシア本土）は、西の果ての一边境地帯に過ぎなかった。況やアテナイは、ギリシアそのものは領土が小さく、その上、無数の都市国家に分かれおり、その中の市民の数わずか数万という都市国家にすぎなかった。

軍事史家ハンセンによれば、「ペルシア帝国の予備兵のマンパワーはギリシアの20倍から50倍はあり、支配下の領土は70倍に達していた」のであり、このような「巨大な帝国がとなりの小国を屈服させるのに失敗した例は、めったにない¹⁾」のである。ペルシアは未だ拡大のための征服戦争を続けていた興隆途上の超大国であり、当然その軍隊はプロの軍隊である。これに対して迎え撃つアテナイ・プラタイア連合軍は、武装自弁の市民軍、すなわちアマチュアの軍隊であった。そもそもギリシア人にとっては、「ペルシア人という名を聞くだけでも恐怖の種となっていた²⁾」のである。戦いに参加したペルシア軍は、25,000と推定されている。これに対して、迎え撃つアテナイ方は、約9,000にプラタイアからの援軍約1,000を合わせても10,000である。その差は2.5倍³⁾、どう見ても勝ち目のない無謀な戦いである。

アテナイは国家存亡の危機に直面していた。まさに風前の灯火であった。にもかかわらずアテナイ人は超大国ペルシアに対して果敢に戦いを挑み、ジャイアントキリング（大番狂わせ）を成し遂げる。マラトンの戦いでの勝利は、その後の世界の歴史を書き換えるものとなった。

ペルシア戦争について実地踏査しそれを纏め上げ、「歴史の父」と呼ばれているヘロドトス（Herodotus, 前484頃-420）は、その『歴史』の冒頭で、次のように述べている。

本書はハリカルナッソス出身のヘロドトスが、人間界の出来事が時の移ろうとともに忘れ去れ、ギリシア人や異邦人^{パルバロイ}の果たした偉大な驚嘆すべき事績の数々—とりわけて両者がいかなる原因から戦いを交えるにいたったかの事情—も、やがて世の人に知られなくなるのを恐れて、自ら研究調査したことを書き述べたのである⁴⁾。(ヘロドトス『歴史』巻1の1)

本稿では、ヘロドトスの『歴史』をもとに、その後の世界史の分岐点ともなったマラトンの戦いに至るまでの歴史を追いかけながら、なぜアテナイは、ペルシア帝国という超大国を相手にジャイアントキリング（大番狂わせ）を成し遂げることができたのか、それを詳らかにしたいと思っている。

1. オリент世界の覇者ペルシア帝国

1-1. オリент世界の興亡

ギリシア各地でポリスが誕生する前9世紀頃、オリент世界では北メソポタミア（現在のイラク）に鉄製の戦車と騎兵を操ってアッシリアが勃興した。前8世紀末のサルゴン2世の頃にはメソポタミア全域を支配し、前7世紀中ごろアッシュール＝バニパル王の時代には、エジプトを含む全オリентを征服し、最初の世界帝国となった。

アッシリア帝国の支配を抜け出しいち早く独立国家として成立したのが、メディア王国である。インド＝ヨーロッパ語族のメディア人が、前715年にイラン高原の北部、カスピ海沿岸のメディア地方に建国したものである。次いで前670年頃に小アジア、現在のトルコのアナトリア半島にリュディア王国が成立した。ほぼ同じ頃の前663年にエジプトが復活した。そして一番遅かったのが、前625年にセム系遊牧民のカルディア人がメソポタミア地方に建国した新バビロニアである。成立したばかりの新バビロニアとメディアの連合軍は、前612年、アッシリア帝国を攻めて首都ニネヴェを占領し、ついにアッシリア帝国を滅ぼした。

アッシリア帝国の滅亡は、その後の、オリエント世界とギリシア世界の激動を予感させるようなものであった。オリエント世界は、エジプト王国、メソポタミア地方を治めた新バビロニア王国、イラン高原のメディア王国、そして小アジアを統治していたリュディア王国の四王国分立時代⁵⁾に入る。

アケメネス朝ペルシアの創始者となるキュロス2世（Cyrus II、在位、前559-529頃）は、前600年頃、ペルシア王国の王である父カンビュセス1世と母マンガネ（メディア王アステュアゲスの娘）の間に生まれた。当時のペルシアはメディア王国に服属する小王国にすぎなかった。父のカンビュセス1世の死を受けて、前559年、キュロス2世がペルシアの王位を継承する。キュロスは、即位してから6年後の前553年に宗主国のメディアに対して反乱を起こした。前550年には、メディアの将軍ハルパゴスと内通し、彼の助けを借りてメディアの首都エクバタナを攻略してメディア王アステュアゲスを倒し、メディアを滅ぼした。

メディアがアケメネス朝ペルシアに滅ぼされることで、四王国連立時代は終焉した。

1-2. イオニア植民都市とオリエント世界

ペルシア戦争の原因となった前499年のイオニア⁶⁾の反乱は、宗主国ペルシアに対してイオニアのギリシア人植民都市が起こした反乱である。

イオニアのギリシア人植民都市の形成は、ギリシア世界が、前1200年のカタストロフィで陥った「暗黒時代⁷⁾」からようやく脱し始めた前800年頃、ギリシア各地でポリスが形成されたのと軌を一にする。多くのギリシア人がギリシア本土を離れて地中海沿岸の各地に移り住み、ポリス（都市国家）を形成した。現在のトルコのアナトリア地方（小アジア）西岸中央部に移住したのが、アテナイなどのギリシア中部のイオニア人である。

イオニアの反乱の発火点になったミレトスは、イオニアの中心都市であった。ミレトスは、オリエント世界とギリシア世界との十字路に位置しており、交易によって栄え、アルカイック期の「ギリシア都市のなかで最も繁栄

していたもののひとつ⁸⁾」であった。隣国のリュディア王国とは、しばしば戦いを交えていたが、前6世紀前半には和平協定を結び提携を深めた。このことによってバビロニア、フェニキア、エジプトなどの先進的なオリエント世界との文化交流が促進された。アルファベットは、レバノンのフェニキア人から借用し改良したものである。数字は、現在のイラク南部のバビロニア人から借用した。貨幣制度は、貨幣経済の発祥の地と言われる隣国リュディアから借用⁹⁾したものであった。

知的刺激に富むミレトスに、イオニア自然哲学が誕生する。ミレトスには、オリエント世界の先進的な自然に関する経験的知識や宇宙観もリュディア王国を媒介にでもたらされた¹⁰⁾。最初の哲学者と呼ばれる、ミレトス学派の3人、タレス (Thales, 前625頃-547頃)、アナクシマンドロス (Anaximandros, 前610頃-547頃)、アナクシメネス (Anaximenes of Miletus, 前545没) は、東方文化の文化遺産をだれよりも十全に活用し発達させたのである。

ミレトス学派の3人が活躍していたまさにこの頃、前560年に隣国リュディア王国にクロイソス (Croesus, 在位、前560-546) が王位に即いた。35歳であった。クロイソスの登場によって、ギリシア人の世界は大国の権力闘争の渦の中に巻き込まれていく。ヘロドトスは、このクロイソスとギリシア人の関係について次のように書いている。

このクロイソスが、われわれの知る限りでは、ギリシア人あるいは征服して朝貢を強い、あるいはこれと友好関係を結んだ、最初の異邦人であった。すなわち彼は、イオニア人、アイオリス人およびアジアに住むドーリス人を征服する一方で、ラケダイモン (スパルタ) とは友好関係を結んだのである。クロイソスの統治以前は、すべてのギリシア人が自由であった。クロイソスより以前にも、キンメリア人がイオニアに侵攻したこともあったが、それも国々を征服するようなことではなく、単に掠奪を目的とする侵入にすぎなかったからである¹¹⁾。(ヘロドトス『歴史』巻1の6)

もともとギリシア人植民都市は近隣諸国と対立することが多かったし、な

かでもリュディア王国には大いに悩まされていた。しかしながら、ヘロドトスも指摘しているように、イオニアのギリシア人都市に侵攻してきても「国々を征服するようなことではなく、単に掠奪を目的とする侵入にすぎなかった」のである。リュディア王国のクロイソスはこれとは全く違っていた。それまでは平和的な交流や交易の関係にあった小アジアのギリシア人植民都市を征服し、その支配下においたのである。ギリシア人植民都市に対して宗主権を確立し、貢納義務を課したのである。ヘロドトスが言うように、「クロイソスの統治以前は、すべてのギリシア人が自由であった」が、その自由を、小アジアのギリシア人たちは失ったのである。

しかし、クロイソスの覇権は長くは続かなかった。メディア王国を滅ぼして台頭してきていたキュロス2世のペルシアが、リュディア王国に迫っていた¹²⁾のである。

1-3. キュロスとペルシア帝国の抬頭

さて、前節で述べたリュディア王国のクロイソスは前595年に生まれ、前560年、35歳の若さで王位に即き、エーゲ海沿岸のギリシア人植民都市を征服し服属させていた。他方、アケメネス朝ペルシアのキュロスは、前600年頃の生まれということだからクロイソスよりも少し年が上であるが、クロイソスから遅れること1年後の前559年に王位に即いた。

アケメネス朝ペルシアのキュロスは、前546年、小アジアに攻め込んだ。迎え撃つリュディア王国のクロイソスは、デルフォイの神託に従いスパルタをギリシア最強の国と信じ、同盟を組んだ。リュディア＝スパルタ連合軍はアナトリア半島中央部のハリュス川に進軍した。ヘロドトスは次のように書いている。

キュロスは、軍隊を動かす前に、イオニア各地に使者を送り、クロイソスから離反させようとした。しかしイオニア人はそれに従わず、かくてキュロスが到着し、クロイソスに対峙して陣地を構えるに及んで、両軍はこのプテリアの地区において、力と力の対決をすることになった。激しい戦闘となり、両軍とも

多数の戦死者が出したが、結局勝敗決せず、日没とともにもの別れとなった¹³⁾。(『歴史』巻1の76)

プテリアでの戦いは勝負がつかないままに終わった。リュディア王クロイソスは「交戦の際自軍がキュロス軍よりも遥かに劣勢であった」と、「翌日キュロスが攻撃してこなかったので、首都サルデイスへと引き上げた¹⁴⁾」。冬に向かう季節であり、ペルシアも一旦は帰国し、戦いは翌年の春になるだろうと考えたからであった。エジプトや新バビロニアと同盟関係を結んでいたので、その援軍を頼み、軍事力を増強して翌年の春の戦いに備えようとしていた。というのは、「あのようなきわどい戦いの後に、キュロスがサルデイスへ進攻してくるとは夢にもおもわなかったからである¹⁵⁾」。それで、「ペルシア勢と交戦した麾下^{きか}の部隊の内、外人傭兵はことごとく暇をやり解散してしまった¹⁶⁾」。

これに対して、ペルシア方のキュロスは、クロイソスの想定に反してそのままリュディアの首都サルデイスに攻め込んだ。なぜか。「クロイソスが撤収後に麾下の軍隊を解散するはずであることを知って思案の末、リュディアの戦力が再び結集されるに先立って、できるだけ早くサルデイスへ出兵するのが得策であるという結論に達した¹⁷⁾」からなのである。相手方の陣営に攻め込んでの戦いである以上、時間的猶予をおけばおほど自分たちには不利になることは自明の理である。リュディアの軍隊が解散したという情報を手に入れたキュロスが、リュディアの首都サルデイスに攻め上る決断を下したのは至極当然のことであろう。

想定外のキュロスの攻撃に面食らいながらも、リュディア軍はペルシアの攻撃によく耐えた。「クロイソスは在位14年、攻囲を受けること14日間、そして神託通り自分の大帝国に終止符を打ったのである¹⁸⁾。」ここにリュディア王国は消滅した。

リュディア王国の属国であったイオニア植民都市は、ペルシアの王キュロスと和を講じていたミレトスを除いて、將軍ハルパゴスの巧妙な攻城戦の前に次々と破れ、ペルシアの支配に服することとなった¹⁹⁾。ペルシアは征服

したギリシア人の諸都市に対して、外交権に関しては重大な制限を加えたが、内政に関しては自治を建前とした。宥和政策をもって臨んだのである。だが、基本的なところで実質上の内政干渉をおこなっていた。宗主権の安定を求めるペルシア王は、己に従順な息のかかった腹心ともいべきギリシア人を都市国家の権力の座に据え、それによって効率よくイオニアやその他のギリシア人都市を支配しようとしていたのである。その結果、ペルシア治下のイオニア世界では、広汎な僭主の輩出を見ることになった。この僭主擁立政策こそが、イオニア反乱の原因²⁰⁾となった。

ペルシア王キュロス最後の遠征は、前 538 年の新バビロニアの征服・併合である。侵入したペルシア軍は、マルドゥク神殿の神官に迎えられて首都バビロンに入城し、新バビロニアを滅ぼした。かくしてキュロスは古代エジプトを除く古代オリエント世界を統一し、空前の大帝国を建設した。

前 529 年、キュロスが 71 歳でなくなると、カンビュセス 2 世 (Cambyses II、在位：前 529-522) が 2 代目となる。カンビュセス 2 世は、ただちにエジプト王国の征服に着手した。エジプトを征服することで、オリエント世界の 4 王国 (メディア、リュディア、新バビロニア、エジプト) のすべてが、ペルシアに併合されたのである。エジプトがペルシアの手に落ちた前 522 年に、2 代目カンビュセス 2 世は夭折している。

ペルシア帝国の 3 代目の王の地位についたのが、キュロスの傍系のダレイオス 1 世 (Dareios I、在位、前 522-486) である。即位後、王位継承問題もからんで帝国各地に大規模な反乱が起こったが、ダレイオスはわずか 1 年ほどで平定し、自己の帝位を不動のものにした。その後、東は北西インドのガンダーラから西はマケドニアまで征服し、ペルシアの版図を最大にした。

ダレイオス 1 世は「諸王の王」と称し、新都ペルセポリスを建設して中央集権体制を強化し、帝国行政組織の整備に取り組んだ。全土を 20 余州に分け、サトラップ (総督) を任命して徴税や治安維持を行うとともに、中央から「王の目」「王の耳」と呼ばれる監察官を派遣して、州行政の監視や商業情報の収集に当たさせた。そのために「王の道」と呼ばれる国道を整備して

駅伝制を敷き、王都と地方を直結する体制をとった。王都と地方を結ぶネットワークは、東はインドとシルクロードにつながり、西は地中海とつながっていた。

このような交通網の整備に加え、金貨・銀貨を発行して税制を整え、フェニキア人の貿易を保護して財政の基礎を固めた。その結果、帝国内におけるアラム人、フェニキア人などの商人は、交易活動の範囲を西地中海からインドにまで広げることができた。ペルシア帝国の保護のもとで活動していたフェニキア商人に対して、前6世紀後半になると地中海ではギリシアが激しく挑戦し始めた。それが、ダレイオス1世の最晩年に起きたペルシア戦争の原因の一つなのである。

2. ギリシア世界とアテナイの勃興

2-1. ポリスの形成と農民戦士

ホメロスの描くトロイア戦争を伝説ではなく史実だと信じ、1870年から73年にかけて行ったトロイア遺跡の発掘調査に成功したのが、実業家にして考古学者のハインリッヒ・シュリーマンである。シュリーマンはこの成功に続けて、トロイア戦争のギリシア軍の将アガメムノンの居城と想定されていた、ペロポネソス半島のミケーネ遺跡の発掘調査に乗り出した。ミケーネ遺跡の発掘調査の成功により、都市国家ポリスの時代をはるかにさかのぼる、前17世紀から12世紀にかけて、ギリシアの地に高度な文明が存在し繁栄していたことが明らかとなった。

繁栄を謳歌していたミケーネ文明ではあるが、前1200年頃に突然崩壊する。「前1200年のカタストロフ²¹⁾」である。各都市の宮殿はことごとく破壊された。ほとんどの宮殿跡に猛火に包まれた形跡が残っており、破壊は北から南へと進んだ²²⁾という。その原因については、侵略、内部抗争、奴隷の反乱、地震、干ばつ、海賊、あるいは度をこした官僚化の弊害がもたらした制度崩壊など様々に指摘されている²³⁾。

前 11 世紀になると各地でミケーネ文明の痕跡は衰微し、ギリシアは考古学的証拠の極端に乏しい時代をむかえる。ギリシアの暗黒時代である。記録は消滅し、壮大な建築物は失われ、人口はミケーネ文明全盛期のおそらく 5 分の 1 以下まで落ち込んだ²⁴⁾と言われている。中央政府は消滅し、それとともに遠隔地貿易とよく整備された農耕制度も、ほとんど壊滅した。豪族が各地の要塞化された小部落を勢力圏に取りこもうとして争う群雄割拠の時代が始まった。わずかにのこされた住民はもはや定住民ではなく、脅威があれば移住することが多かった²⁵⁾。

ミケーネ文明の崩壊は、農民を貢納制から解放した。このことは、暗黒時代のギリシア諸種族の移動という条件とともに、共同体規制の弛緩をもたらした。彼らは集団として移動し、先住民の土地を侵し先住民を隷属させた²⁶⁾。やがて定住し、新しい村が形成されたが、その共同体の成員たる家族は、夫婦、親子より成る小家族を中心とするようになった。アリストテレスは、ポリスが「いくつかの村から生じ²⁷⁾」たと述べているように、この村共同体は、ポリス形成の前段階となった。

集団占拠した土地（共有地）は、個々の村人に分割地として配分された。共同体の成員に持ち分として分配された土地は、籤引きで分けられたので「クレロス」(*kleros*) あるいは「クラーロス」(*klaros*) と呼ばれた²⁸⁾。それは羊や山羊、馬などを飼う牧草地ではなく、小麦などの穀物を栽培する 4 ヘクタールほどの耕地であり、そこには境界を示す石がおかれ、オリーブやぶどうなどの果樹園には垣根や溝がめぐらされていた²⁹⁾。農業の生産性の向上のためには、家族による個別労働の巧みさと配慮によってこれを実現するほかはなかった。泉から水をひく溝を整備し、耕作の畝の深さを適切にし、剪定を巧みにおこない、種蒔きや植物の成長に対する配慮を忘れないことなど³⁰⁾が必要であった。

ポリス形成前夜のギリシアの農民は、王の土地を耕す隷属民でもなく、貴族の土地を借りて農業に携わる借地農でもなかった。数人の奴隷を使い、直接生産者として分割地を耕す独立自営農民であった³¹⁾。つまり、ポリスと

いう市民共同体が成立するための大前提は、農民が分割地所有農民として経済的に自立していたことであった。個別的生産労働の日常的反復による経済的自立の確立は、共同体に対する共同体成員の地位を確実にし、共同体成員相互の関係を、独立的人格の平等を原則とする結びつきにしていた³²⁾のである。

村共同体にとって避けることのできなかった集団労働は、彼らの生活と生産の場を隣接共同体の攻撃から守ることであった。富の多寡による村の有力者たる貴族と民衆という階層分化は生じてはいたが、それが身分制的な支配被支配関係に転化することはなかった³³⁾。彼らは貴族と同じ自由民として村共同体の平等な成員だった³⁴⁾のである。したがって、防衛のための戦争が、村の有力者たる貴族のみによって担われることはなかった。経済的に自立していた分割地所有農民は、自ら武装（武装自弁）し歩兵として貴族と一緒に戦闘に参加し、防衛の一翼を担ったのである。

初期のポリスはどこでも政治の実権を貴族が握る貴族政であった。それは、軍事力の主要な担い手が貴族であったからである。戦争は、自由農民を率いた騎馬の貴族による一騎打ちの戦いであった。個々ばらばらに戦う散開戦術によって戦われていた。

個人戦から集団戦への移行は、重装歩兵の登場を待たなければならない。フィンレーによれば、前700年頃の壺絵に重装歩兵による密集方阵の戦いが描かれている。貴族の一騎打ちの戦いから重装歩兵の密集方阵の戦い（集団戦）への移行の背後には、農民の富裕化があった。武装自弁が原則であるギリシア世界では鎧や兜などの装具を自分で調達しなければならない。よって、重装歩兵の担い手となったのは相対的に富裕な自由農民³⁵⁾であった。では、いかなる理由が、自由農民の重装歩兵を生み出すことになったのだろうか。ウェーバーは、次のように述べている。

一方では農業の販売の機会が発展し、他方では軍事技術が変化する。その結果、甲冑武装する軍務にたずさわりうる経済的能力をもつ土地所有者の範囲は

拡大されることとなった。また、外部からたえず脅威をうけているため、武装を自弁し戦争を遂行する経済的能力あるひとびとのあらゆる層の武装力をもいやでもおうでも徴用せざるをえなかった³⁶⁾。(ウェーバー『古代社会経済史』)

ウェーバーが指摘しているのは、防衛のための軍事力を貴族だけでカバーできなくなったということであるが、それよりも重要なのは、軍事力を提供しうる存在としての農民の成長である。「農業の販売の機会が発展」というのは、農民が自給自足の段階を脱し、余剰生産物の販売、あるいは換金作物の生産販売の段階に入っているということである。換金作物を栽培し商品として売買することで利益を得ているということを前提にしなければ、重装歩兵の武具甲冑の調達などはできない相談だからである。そもそも武具甲冑は、農民の年収の半分ほどの費用がかかった。

牧畜を主としていたギリシアの農業が変化するのは、鉄器の登場によるのである。土地を耕すための道具としての鋤の先端部分、つまり、土を掘り起こす鋤先に鉄が使われるようになった。鋤先に鉄が使われたことで、それまでの木製の鋤では難しかった粘土質の重い土壌の土地にまで耕作地を広げることが可能になった³⁷⁾のである。それは古代ギリシアの農業形態を一変させるに十分であった。牧畜が主だったギリシア世界が、小麦だけでなく、ぶどうやオリーブなどの換金作物を栽培できるようになったのである。ぶどうから葡萄酒が作られ、オリーブからオリーブ油が作られ、それらが商品として売られるようになったのだ。このことは、アテナイにおいて顕著であった。集約化された穀物畑、ブドウ園、果樹園は、今では価値が上昇しつづける私有財産であり、ますます増大する人口をやしなう資源であった。

2-2. アテナイにおける民衆の抬頭と政治闘争

重装歩兵による密集方阵の戦いの登場は、貴族という生まれによって軍隊を構成した段階から、武装自弁できるだけの富を持つものはすべて動員するという段階、つまり、ポリスの軍隊の主役が貴族から武装自弁の農民戦士に

移ったということの意味した。その結果、戦場で支配的な力をもっている武装自弁の農民を、公的生活から締め出すことは、やさしいことではなくなってきていた³⁸⁾。民衆の経済的な力の上昇は重装歩兵の密集方阵の成立と結びついて、彼らの国政参加への要求を生み出していた。軍制の転換が、政治の担い手としての民衆の登場を促していたのである。

アテナイにおいて貴族と民衆の軋轢が表面化した最初の事件が、前632年のキュロン（Kylon、前630頃）の叛乱である。キュロンは、「オリュンピア競技の優勝者であり、血統も良く、有能であった³⁹⁾」ので、民衆の人気が高かった。そこで彼は民衆の支持を背景にクーデタによって貴族支配を倒し、アテナイ初の僭主になろうとした⁴⁰⁾。結局キュロンの叛乱は挫折したが、立法家ドラコン（Drakon）による立法という最初の大きな政治改革をもたらした。裁判権を貴族が独占し、法が不当に歪められていると感じていた民衆は、法の成文化を要求したのである。それに応えたのが、ドラコンの立法である。ドラコンは、前621年、慣習法を集成しこれに改正を施し公布した。アリストテレスによれば、このドラコンの時代に「参政権は自費で武装し得る人々に与えられていた⁴¹⁾」のである。

ドラコンの立法によってもアテナイの政情は安定しなかった。民衆は、貴族からの「借財には誰でも身体を抵当⁴²⁾」にしていた。借金を返済できなければ債務奴隷に落とされた。貴族によって自由民から奴隷に転落させられたのである。このようなこともあって、貴族と民衆の対立抗争は一層激しくなっていた。不安定な政治状況の中で貴族と民衆の調停者にして立法者としての役割を期待されて、ソロン（Solon、前640-560頃）が登場する。

前594年、筆頭アルコンとなったソロンは、「身体を抵当に取って金を貸すことを禁止して民衆を現在のみならず将来も自由であるようにし、またいろいろの法律を定め公私の負債の切捨てを行った⁴³⁾」。つまり、「土地および人身を担保にした債務の免除」という「重荷おろし」を行っただけでなく、「国外に売却されたアッティカの債務奴隷の買い戻し」を行った。ウェーバーによれば、それは、アテナイが「国家の軍事力の基礎となる重装歩兵

軍を維持する⁴⁴⁾』という明白な意志表明であった。つまり、アテナイにおいても重装歩兵の密集方阵の戦術が一般化し、武装自弁できる農民の比重はますます大きくなってきていたということである。

「重荷おろし」と並ぶソロンの大きな改革が、民衆の政治参加を大幅に認めた「財産制」(*timokratia*)の施行である。市民を「財産」によって4つの階級、「富裕級」「騎士級」「農民級」「労務者級」に分けたのだが、それは、生まれによってではなく年収の大きさによってであった。第一級は有力貴族、第二級は中小貴族、第三級は中流農民、第四級は下層農民と商工業者であった。貴族だけでなく、第三級の中流農民も国政に参加できるようになった。この改革は、貴族政の解体の始まりを意味した。なぜなら生まれの高貴さによってのみ政治の要職につく権利をもつと考えられるのが貴族政であるのに対して、生まれではなくその財産によって要職につける可能性を拓いたからである。つまり、一般民衆たる農民層にも政治参与の機会を与えた⁴⁵⁾からである。

ソロンの改革後アテナイでは、異なる地域を根拠にした3つの党派による権力闘争が活発になった。ヘロドトスによれば、もともとの抗争は、「海岸の人々」の党派と「平野の人々」の党派の間にあった⁴⁶⁾。「海岸の人々」というのは、アッティカのヒュメツス山以東の半島部に住んでいた人々のことで、この地方には「中庸の財産ある農民が多く」、また「アテナイ市の職人たちも」この派に加わっていた⁴⁷⁾。「平野の人々」での「平野」というのは、「アテナイの西部、ケビソス河に沿うアッティカ第一の平野で富裕な地主貴族の地盤⁴⁸⁾」であった。したがって、この党派が、貴族の利害を重視する「寡頭政治」を求めるのは当然のことであった。この両者の争いに、ペイストラトス (Peisistratos, 在位、前560-527) が、「第三党」として「同志を集めて自ら山地党の党首と称し⁴⁹⁾」て、割って入ってきたのである。「山地」というのは、「アッティカ東北部の山地で貧窮な小農や牧人らの住んでいたところ⁵⁰⁾」であった。いずれの党派の領袖も名門貴族に属していたが、党派間の争いには貴族と民衆の対立が織り込まれていた。つまり、支持

基盤を穏健な中農層にもつ中間派と富裕な地主貴族を支持基盤とする寡頭派の争いに、下層農民を支持基盤とするペイストラトス一派が食い込んできたという図式である。

ペイストラトスは、父ヒポクラテスが伝説のピュロス王ネストルの末裔であり、母はソロンの母方の従姉妹という名門の出身⁵¹⁾であった。彼自身ソロンと親しいつきあいをしていた。

ソロンの改革は、ポリスの「民主化」というにはほど遠いものの、それまで政治から疎外されていた一般民衆を政治の場に引き出し、政治に馴染ませてきていた。民衆にとっての政治の舞台は広場^{アゴラ}であり民会であった。ペイストラトスは、この広場^{アゴラ}や民会にいる民衆を味方につけ、政権を奪取した。

つまり、こうである。彼は「自分で自分の体と驢馬を傷つけて」、広場に車でのりつけ、「敵方が田舎へ行こうとした自分を襲って殺そうとしたが、その手を逃れてきたところだ⁵²⁾」と民衆に訴えたのだ。この芝居じみた訴えが功を奏して「多勢がそれに応じて憤り、叫び出⁵³⁾」すような事態が生じた。ペイストラトスは民会を招集することに成功し、民会の決議で「棍棒持ち」と呼ばれる護衛兵を得た。合法的に私的な軍隊を得たのである。彼は「これをもって民衆に抗して立ち、〔ソロンの〕法律制定ののち、32年目のコメアスのアルコンの年にアクロポリスを占領⁵⁴⁾」し、僭主となった。

ペイストラトスの勢力の基盤は中小農民にあったので、その保護育成は、彼に課せられたいわば歴史的任務であった。これまで公務に携わることからまったく排除されていた多くの人びとを政治に参加させた⁵⁵⁾ので、中小農民層を主体とする村落自治がアッティカ各地に根を下ろした。古典期アテナイ市民団の中核たるべき中小農民層は、ペイストラトスの一連の施策によってその地歩を確立しただけでなく、この自治の経験を通じて政治的に覚醒したのである⁵⁶⁾。それは、実質的にはソロンの改革の一步先をゆくものであった。

ギリシア史の世界的権威ポール・カートリッジによれば、「ペイストラトスの父子の最大の功績は」、「決して無意味ではないレベルまで、より広い

階層の住民による日常的な政治参加を推進したこと⁵⁷⁾」にあるのである。

2-3. クレイステネスの改革

ペイシストラトスの死後、長子ヒッピアス（Hippias, 在位、前527-510）が僭主となり、弟ヒッパルコスとともに統治した。「父の死後およそ17年間僭主政を維持⁵⁸⁾」したが、弟が男色のもつれから前514年に暗殺されると、ヒッピアスは暴政に転じ、大勢の市民を処刑・追放した。怨嗟の聲が高まり、前510年、遂に一族もろともアテナイから放逐された。

僭主追放後の権力闘争を勝ち抜き民衆派のリーダーとなったのは、穏健派のクレイステネス（Cleisthenes, 前570頃-508）である。即座にアテナイの改革に着手した。内紛の元凶となっていた地域と部族とのつながりを断つために、4部族制を廃止した。その代わりに地域的な行政単位をもとにして人工的に編成した10部族制を導入することによって、部族共同体の新たな枠組みを確立した⁵⁹⁾。それは、デーモス（区）を市域・内陸・沿岸の3地域に分け、3地域をさらに10に細分して組を作り、そして3地域のそれぞれの組を一つずつ合わせて一つの部族とするものである。これは、かねてよりアテナイの宿痾となっていた、土地と血縁関係に根ざす3つの党派（市域を中心とする貴族主体の「平野の人々」の党派、沿岸部を根拠地とする富裕農民と職人主体の「海岸の人々」の党派、そして内陸の高地を根拠とする貧しい農民や牧人が主体の「山地の人々」の党派）の抗争に終止符を打つことを狙いとするものであった⁶⁰⁾。これら3地域出身の人々をまとめて一つの部族を人為的に形成することで、ポリス内部の社会的対立を解消し、市民団の一体性に基盤を置く政治体制を創出しようとした⁶¹⁾のである。

クレイステネスの改革は、ウェーバーによれば、在留外国人や被解放民などの財産ある人々を新市民として「全面的に共同体に組み入れ、これによってあわせて国家の門閥的な編成を破壊しようとした⁶²⁾」ものであった。貴族政の根幹をなした「門閥団体を故意に寸断」し、まったく「新しい純粋に地域的な国家区分が施行」されたのである。すべての人は、そして都市在住

者も、「みずからの地^{デーモス}域的な区^{デーモス}を持ち、この区にすべての人は国法上、永続的かつ世襲的に所属」し、そこで、「民衆裁判権の招集ならびに陶片追放⁶³⁾」も行われたのである。つまり、彼の行った部族制の再編成は、ソロンによって着手され、ペイシストラトスによって壊されてきていた貴族政を土台から突き崩し、それに代わる民主政の土台を構築するものであったと言ってよいであろう。それゆえ、数世紀に及ぶ古代アテナイの歴史のなかで、このクレイステネス改革ほど「人々の生活に大きな変化をもたらしたものは、ほかに例がない⁶⁴⁾」と言われるのである。

クレイステネスによって、民会という政治的装置がポリスの最高意思決定機関としてだけでなく、民衆の政治参加を担保するものとして、つまり「政治的平等」としてのイソノミアを実現するものとして整備されていく。露天の民会議場が、^{アゴラ}広場や貴族政の時代から最重要な統治機関であったアレイオス・パゴス会議が設置されていたアレイオス・パゴスを見下ろすプニュックスの丘に造られた。クレイステネスの改革から4年後の前504年のことである。収容人数は、およそ5,000人であった⁶⁵⁾。18歳以上の成年男子市民が出席するこの定例の民会は、各プリュタネイア（1年の10分の1の期間）に4回ずつ、最低でも年40回は開催された。民会は、戦争や平和、条約、財政、立法、公共事業、つまり統治活動の全領域に最終的な決定権を持っていた。提出された議題の表決は、通常は一日の討議で行なわれ、原則として出席者全員が平等な発言権（イセゴリア）をもっていた。

3. ペルシア戦争

3-1. イオニアの反乱

ペルシアに対する反乱は、前399年、ミレトスの僭主代理アリスタゴラス（Aristagoras, 前497没）によって起こされた。彼は、まずミレトス市民を味方にするために、自身が僭主代理であったのにミレトスの僭主政を廃止し民主政にした。それだけでなく、ナクソス遠征のためにミレトスに集結してい

他のイオニア諸国の僭主を逮捕し、本国に送り返すという策をとった。

アリスタゴラスはまず、ミレトス人が進んで自分の謀反に加担してくれるように、本心は兎も角名目上は、ミレトスで独裁制を廃して万民同権の民主制を敷くこととしたが、続いてイオニアの他の地区にも同様の政策を実施しようとし、幾人かの独裁者を追放したり、また彼と共にナクソス遠征に参加した船団から捕らえてきた独裁者たちを、町々に恩を売るため、それぞれの出身地である町へ引き渡したりしたのだ⁶⁶⁾。(ヘロドトス『歴史』巻5の37)

アリスタゴラスは、船隊を北や南に出動させて、ヘレスポントスやカリア地方の多くの町をミレトスの同盟とすることに成功し、はるかなるキプロスも自発的にペルシアに反旗を翻した。反乱は燎原の火のように東地中海世界のギリシア人植民都市に広がっていった。

イオニアの反乱は、アテナイのクレイステネスの改革が起きて10年足らず後のことである。小アジアのギリシア人植民都市の人びとにとっても、前508年のアテナイにおけるクレイステネスの改革で始まった民主政は、体制選択のもう一つの可能性となった。それも実に魅力的な体制選択となった。ペルシアがイオニア人に押し付けた、あるいは元々あった僭主政は、もはや時代遅れと感じられていたに違いない。少なくともイオニアのギリシア人植民都市の人々はそう感じていた。僭主政は人びとの支持を得られなくなっていたばかりか憎悪の対象にすらなっていたのである。つまり、「反乱には大衆の基盤⁶⁷⁾」があったのである。僭主政に対する大衆的な反感こそがイオニア反乱の原因⁶⁸⁾ではないのかというのは、現代の研究者の共通認識のようである。政治の主体として成長してきていた民衆にとって、僭主政は独裁であり、アジア的な専制と同一視されるようなものであった。

反乱が起きて6年目によくミレトスはペルシアによって鎮圧された。ミレトスの街はペルシア軍によって跡形もないほど徹底的に破壊された。ミレトスの人びとの運命も過酷なものであった。殺戮されるか奴隷としてペルシアに連れて行かれた。その翌年にはキオス、レスボスという沿岸党島嶼も平定されて、7年に及んだイオニア反乱もようやく終止符が打たれた⁶⁹⁾。

3-2. マラトンの戦い

イオニアの反乱を鎮圧した後、ダレイオス大王は、反乱を支援したエトリアとアテナイを攻め落とすと決め、本格的な遠征を行うことにした。出撃の1年前の前491年、「ペルシア王に土と水を献ぜよと要求する使者をギリシア各地に派遣⁷⁰⁾」した。ギリシア本土においてもペルシア王の要求に応えるポリスが少なくなかったが、エーゲ海の島嶼部では、「使者の訪れたことごとくの島がその要求をいれた⁷¹⁾」のである。

翌年の前490年、ダレイオス大王は、司令官2人を任命し、アテナイとエトリアを討伐することを命じた。遠征軍は、「十分に装備を整えた陸上部隊の大軍を率いて進発」し、キリキア（現在のトルコ南部、キプロスの対岸部）のアレイオン平野に到着して陣を張った。そこに、「かねて諸民族に供出を命じてあった海上部隊」が合流し、前年ダレイオスが自国の朝貢国に調達方を手配しておいた馬匹輸送船も到着した⁷²⁾。陸上部隊も艦船に乗せて、600隻の三段櫂船でギリシアに向けて出発した。途中、小アジアとギリシア本土との間のエーゲ海に浮かぶナクソスを攻め、「捕らえただけのナクソス人を奴隷にし、聖域と市街に火を放って焼き⁷³⁾」払った。そこからエーゲ海を越えて最初の攻撃目標であるエトリアに渡る途中で「次々に島に接岸してそこから軍兵を徴用し、住民の子どもを人質⁷⁴⁾」にとったのである。

ペルシア軍の攻撃を受けたエトリア人は、「出撃はもとより迎撃する意図もなく、町を放棄せぬ説が大勢を制してからは、何とかして城壁を守ることにのみ専念⁷⁵⁾」した。激しい攻撃を6日間は耐え、双方に多数の死者が出た。7日目になって、「町の有力者であったアルキマコスの子エウボルボスとキュネアスの子ピラグロスの二人がペルシア方に寝返り、開城した。「ペルシア軍は町に侵入し」、「聖所を掠奪した上火を放ち」、「ダレイオスの命じたとおり市民を奴隷にした⁷⁶⁾」のである。

ペルシア軍はエトリアを陥し、数日の間を置いただけで、アッティカ領を目指して艦隊を進めた。「大いに気負ってアテナイ人にもエトリア人同

様の憂き目に遭わせんものと意気込」み、アッティカ北部のマラトンに上陸した。

ペルシアの遠征軍とアテナイ・プラタイアの連合軍は、マラトンの平野で対峙した。ペルシアの遠征軍は、軽装歩兵、弓兵、騎兵を展開し、中央部に主力を配して陣を張った。戦いに参加したのは、ペルシア軍 25,000 と推定されている。これに対して、アテナイは約 9,000、プラタイアからの援軍約 1,000 の連合軍である⁷⁷⁾。

ヘロドトスによれば、戦いは以下のものであった。

「陣立てを終わり犠牲の卦も吉兆を示したので、アテナイ軍は進撃の合図とともに駆け足でペルシア軍に向かって突撃した」。両軍の間の距離は、8 スタディオン（およそ 1,500 m）であったという。「ペルシア軍はアテナイ軍が駆け足で迫ってくるのを見て迎え撃つ態勢を整えていたが、数も少なくそれに騎兵も弓兵もなしに駆け足で攻撃してくるのを眺めて、狂気の沙汰じゃ、全く自殺的な狂気の沙汰じゃと罵っ」ていた。しかし、「一団となってペルシア陣内に突入してからのアテナイ軍は、まことに語り伝えるに足る目覚ましい戦いぶりを示した」。「マラトンの戦いは長時間にわたって続いた」。戦線の中央部では、「ペルシア軍は敵を撃破して内陸に追い進んだ」が、「両翼においてはアテナイ軍とプラタイア軍が勝利を取めた⁷⁸⁾」。「勝利を得たアテナイ、プラタイアの両軍は、潰走する敵部隊は逃げるにまかせ、両翼を合わせて中央を突破した敵軍を攻撃し、かくて勝利はアテナイ軍の制するところとなった⁷⁹⁾」。

3-3. なぜ勝利できたのか

マラトンの戦いは、結果として、数時間の戦闘で決した。ペルシア軍の戦死者は 6,400 人、アテナイ軍の戦死者はわずかに 192 人という、アテナイ・プラタイア連合軍の圧倒的勝利に終わった。だがそれは、勝利の確率が万分の一という、まさに薄氷を踏む戦いでの結果であった。そのことを可能にしたのは、クレイステネスの改革でその基礎が築かれた民主政、重装歩兵の密

集方陣、そして、卓越した指導力を発揮した老将軍ミルティアデス (Miltiades, 前 554 頃-489 頃) の存在である。

前 593 年、ペルシアの脅威が迫るなか、60 歳に手が届こうとしていたミルティアデスが、30 数年ぶりに帰国する。彼は、エーゲ海から黒海へ至るヘレスポントス海峡の左岸にあるギリシア人植民都市ケルソネソスの僭主であったが、イオニアの反乱鎮圧の余波を蒙り、ペルシア軍に追われて命からがらの帰国であった。帰国早々に弾劾裁判にかけられた。反対する者たちは、彼を「裁判にかけ、ケルソネソスにおける専制の罪を弾劾した」が、この「追求も無事に切り抜け、民会において選出されて、アテナイ軍の司令官に任命されたのである⁸⁰⁾」。国難の危機にあつて、前歴が僭主であっても将軍として優秀かどうかという基準でミルティアデスを将軍に任命したところに、アテナイに民主政が根付き始めているのを見て取ることができるだろう。

前 590 年、ペルシア軍のマラトンへの上陸が伝わると民会が開催された。ペルシア相手に戦うかどうか、戦うとすれば、都市アテナイでの籠城戦なのか、それともマラトンまで出陣して会戦を行うのかが問われた。民会での議論をリードしたのは、老将ミルティアデスである。彼の建議、すなわち、マラトン平野での会戦が採択⁸¹⁾された。

会戦というのは、一定地域に双方の軍が大兵力を集結して行なう戦いである。騎馬兵・弓兵・歩兵の組み合わせで戦うペルシア軍にとっては、会戦が圧倒的に有利である。会戦は、数的有利を確実に活かせる戦いである。よって数的に不利な場合は、籠城戦か奇襲や夜襲などのゲリラ的な戦いに活路を見出すのが普通である。

それにもかかわらず、ミルティアデスは、会戦を選んだ。なぜか。それは、会戦の持つ特質にあった。会戦というのは、敵の戦力を徹底的に撃滅する性格を有する、大規模かつ決定的な戦闘である。何よりも短時間で決着がつく。動員できる戦力においても物量面においてもペルシアは、アテナイ・プラタイア連合軍を圧倒していた。会戦はペルシア軍に圧倒的に有利であ

る。その上、長期戦になればなるほど、ギリシア本土の多くのポリスを宗主権下におき十分な補給を確保できていたペルシアの方が、絶対的に有利である。アテナイにとって運用可能な戦力はアマチュアの武装自弁の市民兵（農民）であってみれば、そもそも長期戦にはむかないのである。会戦は、アテナイにとっては絶対的に不利な戦さであるが、それでもアテナイが生き残るには、短期決戦で決着がつく会戦しか選択の余地がなかったのだ。推測でしかないが、そのことをペルシア軍の下で戦った経験をもつ老練なミルティアデスは十分に認識していたのである。だからこそ、彼は民会でペルシアとの戦いでアテナイが生き延びるには短期決戦の会戦しかないことを説得したのであろう。

戦場のマラトンにおいても老将ミルティアデスのリーダーシップは、遺憾なく発揮された。スパルタ軍の到着が遅れていたこともあって、將軍たちは交戦派と非交戦派に分かれて争っていた。戦いを指揮する司令官は、各部族1名ずつの10人の將軍と、アルコンの一員であるポレマルコス（軍事長官）とで構成されていた。直ちに戦うか、スパルタからの援軍を待つかの決定は、10名の將軍とポレマルコス（軍事長官）の会議で決せられた。將軍の数では交戦派と非交戦派は同じであった。そこでミルティアデスは、ポレマルコス（軍事長官）のカリマコスの説得した。「もしわれらが戦わぬならば、必ずやわが国に激しい内部分裂が起こってアテナイ国民の士気を動揺せしめ、その結果はペルシアに屈することになるに違いない⁸²⁾」と説得したのである。

会戦当日の布陣であるが、ミルティアデスは陣の長さをペルシア軍と同じにした。アテナイ・プラタイア連合軍は、ペルシア軍に対して数的に不利なので、中央部分を薄く両翼を厚くという陣形をとった。なぜか。ペルシア軍は、両翼を騎兵や弓兵によって削ぎ落としながら中央突破するのを常道としていた。そのことを、よく知っていたので、ミルティアデスは、その戦術の逆をついたのである。つまり、敢えて中央突破を許しながら、両翼を撃破し、そして、奥深く入り込んだペルシア軍を挟み撃ちするという戦術であ

る。

ミルティアデスが、「駆け足でペルシア軍に向かって突撃」するという戦術を採用したのも、ペルシア軍の戦術を熟知していたがゆえである。ペルシア軍の戦い方は、両軍の重装歩兵が正面衝突する前に、弓兵が多数の矢を射て敵兵に損害を与えて意気阻喪させ、そこを衝いて正面突破を図るというものであった。ペルシア軍の弓兵の効力を弱めるためには、弓矢攻撃の被害がでる前に攻撃を仕掛ける必要がある。そこでミルティアデスが採用したのが、駆け足戦術である。もちろん重装歩兵が長距離を走ることにはリスクがある。駆け足の距離が長いと、密集方陣の隊形が崩れる。重装歩兵の密集方陣の戦いは集団戦である。隊列を崩すことなく一糸乱れず集団で戦うからこそ、個人攻撃を仕掛けてくる相手に対して無敵なのである。駆け足の結果、隊列が崩れて個人戦になると、その威力は半減どころかほとんど無になる可能性がある。よって、駆け足突撃の号令は、ヘロドトスが書いているように、対峙した1,500 mの距離からではなく、ジリジリとお互いに詰め寄り、アテナイ・プラタイア連合軍にとっては、ペルシアの弓兵の攻撃による味方の損害と駆け足での体力の消耗や隊形の乱れを天秤にかけて、まさに絶妙なタイミング⁸³⁾で出されたと思われる。これも推測に過ぎないが、弓の射程距離と駆け足での体力の消耗や隊列が乱れないギリギリを考えると、おそらくは、両者の距離が100 m内に入った頃に駆け足突撃したのではないだろうか。

ペルシア軍の戦いが中央を突破であることを想定し、両翼を厚くした戦術は功を奏した。中央部はペルシア軍に押し込まれたが、両翼のアテナイ・プラタイア連合軍はペルシア軍を撃破したのである。両翼のアテナイ・プラタイア連合軍は、逃げる敵を追撃することなく、中央深く入り込んだペルシア軍を両側から挟み撃ちした。想定外の事態に慌てふためいたペルシア軍と、指揮官の号令下でまさに一糸乱れず戦ったアテナイ・プラタイア連合軍との差は歴然としていた。

ペルシアの重装歩兵の槍はギリシア兵の槍よりも短く使いやすいが、集団

戦というよりは個人戦向きであった。重装歩兵の密集方陣に個々ばらばらに突進していった場合、最前列の槍だけが戦いの相手ではない。それを払いのけて盾で身を守っている最前列のアテナイ兵を倒そうと近づいていくと、左からのみではなく後列からも槍が繰り出されてくる。これを防ぐのは容易ではない。幾重もの槍ぶすまを作っている重装歩兵の密集方陣を突破するのは至難の技であった⁸⁴⁾。

組織的に構成された力とばらばらな個人の力との戦いでは、勝敗は自ずと明らかであった。数時間の戦闘でペルシア軍の戦死者は6,400人であったが、アテナイ軍の戦死者はわずかに192人であり、プラタイア軍の戦死者はそれよりも少なかったという。戦死者率は30対1という、驚くべき結果だった。この数値は、隊列を組んで平坦な地形で戦う重装備の槍兵の破壊力のすさまじさを物語っている⁸⁵⁾。

ミルティアデスの戦術がきちんと機能したのは、重装歩兵の密集方陣が塊となって戦ったからである。そのためには十分な訓練が必要である。「重装備を施した多数の戦士が一条乱れぬ行動をとり、かつ、この隊形にふさわしい戦法を身につける⁸⁶⁾」に数年にも及ぶ長期の実地訓練が行われていた。

ペルシア軍との圧倒的な物量の差、戦力差を埋めたのは、アテナイの兵士たちが有していた「高い倫理観⁸⁷⁾」である。ヘロドトスによれば、アテナイがペイストラトス家の僭主政下にあった時には、「近隣のどの国をも戦力で凌ぐことができなかつた」のに、「独裁者から解放されるや、断然他を圧して最強国となったからである」という。なぜか。それは、独裁者の下では、「故意に卑怯な振る舞いをしていた」のに、「自由になってからは、各人がそれぞれ自分自身のために働く意欲を燃や⁸⁸⁾」すようになったからである。自分自身のために働くということは、自らの存立基盤であるポリスのために働くということであった。ポリスに対する圧倒的な忠誠心を支えていたのは、まさに彼らがクレイステネスの改革で手に入れた自由と平等であった。

終わりに

日中の激戦で疲労していたアテナイ軍であったが、重装歩兵は隊列を組んで山間の難路に向かった。8時間の行軍だった⁸⁹⁾。ペルシア軍が、「残りの船の向きを変えて沖に逃れ」「スニオン岬を廻って船を進め⁹⁰⁾」、アテナイ市に向かっていたからである。

ペルシア軍がスニオン岬を廻っている一方、アテナイ軍は町を救うべく足の続く限りの速さで急行し、ペルシア軍の到着以前に帰国することができた。そしてマラトンでもヘラクレスの聖域に布陣したのであったが、この時もキュノサルゲスにあるヘラクレスの杜の境内に陣をとった⁹¹⁾。(ヘロドトス『歴史』巻6の116)

マラトンの地で戦った重装歩兵の不意のアテナイ帰還で、ペルシア軍はアテナイ市への攻撃を諦め、「アジアへ引き上げていった⁹²⁾」。都市国家アテナイは、巨大帝国ペルシア相手に圧倒的勝利を取めたのである。

その10年後の前480年、ダレイオス大王の息子クセルクセス1世(Xerxes I, 在位、前486-465)が、(誇張された数字とされているが、ヘロドトスの記述によれば)530万という大軍で再度ギリシアに侵攻する。しかし、アテナイは本拠地を奪われながらも抵抗を続け、サラミスの海戦でペルシア海軍を打ち破った。その様子を高台から観戦していたクセルクセスは戦意を喪失し、ペルシアに引き上げていった。以後、何度か小競り合いが続くものの、前449年にペルシアとギリシアとの間で和睦が成立した。

ペルシア戦争において、アテナイがギリギリのところでも勝利をもぎ取ることができたのは、民主化に間に合ったからである。アテナイ・ポリスの揺籃期、種々の政争と改革によって貴族政から僭主政へと移行し、最終的に民主政樹立に至る期間は、世界史的に見て大帝国の母胎となり続けているオリエン特世界において、大帝国が消滅し、再び勃興する端境期に位置している。さらに言えば、ギリシア世界は、オリエン特世界にとって辺境の地であっ

た。それゆえ、ギリシア世界はオリエン特世界の権力闘争の外に置かれていたのである。つまり、ギリシア世界は、権力の真空状態にあるという幸運に恵まれていた。これらの外部条件こそが、アテナイに自生的な発展を遂げることを許容し、政治闘争と政治改革によって民主政の基礎を築くことを可能にしたのである。

イオニアの諸都市とアテナイが無謀にも超大国ペルシアに立ち向かったのは、服従と安全ではなく、自治と自由すなわち民主政を選び取ったからである。したがって、ペルシア戦争の勝利によって命脈が保たれたのは、ギリシア人たちの独立のみならず、民主政という理念そのものだった。マラトンの戦いは「純粋にアテナイだけの戦争であり、これが紀元前5世紀のアテナイの文学的、芸術的、哲学的な創造力と宣伝力の土台となった」。「勇猛なアテナイの農夫が全世界に独力で立ち向かった⁹³⁾」ペルシア戦争は、アテナイの民主政が歴史の表舞台に躍り出た瞬間であった。

注

- 1) Victor Davis Hanson, *Wars of the Ancient Greeks*, Smithsonian Books, 1999, p. 89. 『図説 古代ギリシアの戦い』(遠藤利国訳、東洋書林、2003)、109頁。
- 2) ヘロドトス『歴史(中)』(松平千秋訳、岩波文庫、2012年)巻6の112、306頁。
- 3) 同上、203頁参照。
- 4) ヘロドトス『歴史(上)』(松平千秋訳、岩波文庫、2011年)巻1の序、9頁。
- 5) アッシリア帝国滅亡後の四王国対立時代を迎えるが、その四王国を成立の古い順に紹介する。一番古いのがメディアである。紀元前715年頃にイラン高原に興った。次いで、興ったのが、小アジア、現在のトルコに紀元前670年頃成立したリュディア王国である。エジプト王国は、紀元前663年に復活した。最後に成立したのが、紀元前626年頃成立の新バビロニアである。メソポタミア地方、現在のイラクを版図とした。
- 6) イオニアというのは、現在のトルコのアナトリア半島のエーゲ海沿岸部の地方を指す。
- 7) 「暗黒時代」とは、この紀元前1000年を前後とする時代、もっと広くとれば諸宮殿が崩壊した紀元前1200年頃からポリスが誕生してくる紀元前750年頃までのことである。この論文では、従来の慣用にしたがって暗黒時代という時代表記を採用しているが、暗黒時代という表記が価値否定的な印象を与えることもあって、最近では価値中立的な「初期鉄器時代」という時代名が用いられるようになってきてい

- る、という（周藤芳幸「ギリシア世界の形成」桜井万里子編著『ギリシア史』（山川出版社、2005年）、44頁参照）。
- 8) ポール・カートリッジ『古代ギリシア 11の都市が語る歴史』（橋場弦監修、新井雅代訳、白水社、2011年）、55頁。
 - 9) 同上、50頁参照。
 - 10) 廣川洋一『ソクラテス以前の哲学者』（講談社学術文庫、1997年）、49頁参照。
 - 11) ヘロドトス『歴史（上）』巻1の6、13頁。
 - 12) J. M. ロバーツ『世界の歴史2 古代ギリシアとアジアの文明』（監修桜井万里子、月森左知訳、創元社、2003年）157頁参照。
 - 13) ヘロドトス『歴史（上）』巻1の76、71頁。
 - 14) 同上、同頁。
 - 15) 同上、72頁。
 - 16) 同上、同頁。
 - 17) 同上、巻1の79、73頁。
 - 18) 同上、巻1の86、80頁。
 - 19) 馬場恵二『ペルシア戦争 自由のための戦い』（教育社、1982年）、20頁参照。
 - 20) 同上、23頁参照。
 - 21) 周藤芳幸、前掲書、45頁。
 - 22) ジョン・キャンプ、エリザベス・フィッシャー、『図説古代ギリシア』（吉岡晶子訳、東京書籍、2004年）、79頁参照。
 - 23) Cf. , Victor Davis Hanson, *op.cit.*, p. 32. V. D. ハンセン『図説 古代ギリシアの戦い』、34頁参照。
 - 24) 周藤芳幸、前掲書、44頁参照。
 - 25) トゥキディデス『歴史1』（藤縄謙三訳、京都大学学術出版会、2000年）、4頁。
 - 26) 太田秀通『ミケーネ社会崩壊期の研究』（岩波書店、1968年）、341頁参照。
 - 27) Aristotle, *Politics*, with an English translation by H. Backham, Loeb Classical Library, Harvard University Press, 1932, rep. 1944, p. 3. アリストテレス『政治学』（牛田徳子訳、京都大学出版会、2001年）、8頁。
 - 28) 太田秀通、前掲書、341頁参照。
 - 29) Cf. , Victor Davis Hanson, *op.cit.*, p. 44. V. D. ハンセン『図説 古代ギリシアの戦い』、56頁参照。
 - 30) 太田秀通『スパルタとアテネー古典古代のポリス社会—』（岩波書店、1970年）、50-51頁参照。
 - 31) 伊藤俊太郎編著『人類文化史② 都市と古代文明の成立』（講談社、1974年）、252頁参照。
 - 32) 太田秀通『ミケーネ社会崩壊期の研究』、414頁参照。
 - 33) 太田秀通『スパルタとアテネー古典古代のポリス社会—』、50-51頁参照。
 - 34) Cf. , Victor Davis Hanson, *op.cit.*, p. 35. V. D. ハンセン『図説 古代ギリシアの戦い』、41頁参照。

- 35) モーゼス・I. フィンレー『古代ギリシア人』（山形和美訳、法政大学出版局、1989年）、37頁参照。
- 36) ウェーバー『古代社会経済史』（上原専祿・増田四郎監修、渡辺金一・弓削達訳、東洋経済新報社、1963年）、202頁。
- 37) ウィリアム・H・マクニール『戦争の世界史—技術と軍隊と社会—』（高橋均訳、中公文庫、2014年）、41頁参照。
- 38) A・アンドリュース「都市国家の発達」（H.ロイド＝ジョーンズ編『ギリシア人』（三浦一郎訳、岩波書店、1981年）、44頁参照。
- 39) トウキュディデス、前掲書、第1巻の126、120頁。
- 40) 同上、同頁。
- 41) アリストテレス『アテナイ人の国制』（村川堅太郎訳、岩波文庫、1980年）第4章、20頁。
- 42) 同上、第5章、21頁。
- 43) 同上、第6章、22頁。
- 44) ウェーバー『古代社会経済史』、217頁。
- 45) 伊藤俊太郎編著、前掲書、256頁参照。
- 46) ヘロドトス『歴史（上）』、巻1の59、53頁参照。
- 47) アリストテレス『アテナイ人の国制』、訳注、160頁。
- 48) 同上、訳注、161頁。
- 49) ヘロドトス『歴史（上）』巻1の59、53頁。訳を「高地」から「山地」に変更。
- 50) アリストテレス『アテナイ人の国制』、訳注、161頁。
- 51) 松原國師『西洋古典学事典』京都大学出版会、2010年、1088-89頁参照。
- 52) ヘロドトス『歴史（上）』巻1の59、53頁。
- 53) プルタルコス「ソロン」『プルタルコス英雄伝 上』（村川堅太郎編、ちくま文庫、1987年）、144頁。
- 54) アリストテレス『アテナイ人の国制』、14章、33頁。この護衛兵の数を、フランソワ・シャムーは300人と推定している（『ギリシア文明』（桐村泰次訳、論創社、2010年）168頁参照）。
- 55) A・アンドリュース「都市国家の発達」（H.ロイド＝ジョーンズ編（三浦一郎訳）『ギリシア人』（岩波書店、1981年））、48頁参照。
- 56) 伊藤貞夫『古代ギリシアの歴史 ポリスの興隆と衰退』（講談社学術文庫（講談社）、2004年）、183頁参照。
- 57) ポール・カートリッジ、前掲書、93頁。
- 58) アリストテレス『アテナイ人の国制』、43頁。
- 59) 澤田典子『アテネ民主政 命をかけた八人の政治家』（講談社、2010年）、15頁参照。
- 60) 前沢伸行「ポリスとはなにか」弓削達編『地中海世界』有斐閣（有斐閣新書）、1979年、39頁参照。
- 61) 同上、36頁参照。

- 62) マックス・ウェーバー『古代社会経済史』、226頁。
- 63) 同上、同頁。
- 64) ビエール・ブリュレ『都市国家アテネ ペリクレスと繁栄の時代』（青柳正規監、創元社、1997年）、58頁。
- 65) Cf. ., *Hills of Philopappos-Pnyx-Nymphs* (Publication of the Association of Friends of the Acropolis, 2004), p. 19.
- 66) ヘロドトス『歴史（中）』、巻5の37-160頁。
- 67) 中井義明『古代ギリシア史における帝国と都市—ペルシア・アテナイ・スパルタ—』（ミネルヴァ書房、2004年）、52頁。
- 68) 同上、44頁
- 69) 馬場恵二『ペルシア戦争 自由のための戦い』（教育社、1982年）、61頁
- 70) ヘロドトス『歴史（中）』、巻6の48、258頁。
- 71) 同上、巻6の49、258頁。
- 72) 同上、巻6の95、292頁。
- 73) 同上、巻6の96、293頁。
- 74) 同上、巻6の99、295頁。
- 75) 同上、巻6の101、296頁。
- 76) 同上、巻6の101、297頁。
- 77) 伊藤貞夫『古代ギリシアの歴史—ボリスの興隆と衰退』、203頁参照。
- 78) ヘロドトス『歴史（中）』、巻6の113、306頁。
- 79) 同上、巻6の113、306頁。
- 80) 同上、巻6の104、298頁。
- 81) 伊藤貞夫『古代ギリシアの歴史—ボリスの興隆と衰退』、203頁参照。
- 82) ヘロドトス『歴史（中）』、巻6の109、303頁。
- 83) 橋場弦『民主主義の源流—古代アテネの実験』（東京大学出版会、1997年）、37頁参照。
- 84) 同上、30頁参照。
- 85) ヘロドトス『歴史（中）』、巻6の117、308頁参照。Cf. ., Victor Davis Hanson, *op.cit.*, P. 90. V. D. ハンセン『図説—古代ギリシアの戦い』、107頁。
- 86) 伊藤貞夫『古代ギリシアの歴史—ボリスの興隆と衰退』、138頁。
- 87) サイモン・アングリム、フィリス・G・ジェスティス、ロブ・S・ライス、スコット・M・ラッシュ、ジョン・セラータ『戦闘技術の歴史1—古代編』（松原俊文監修、天野淑子訳、創元社、2008年）、22頁参照。
- 88) ヘロドトス『歴史（中）』、5巻の78、191頁。
- 89) Cf. ., Victor Davis Hanson, *op.cit.*, p. 90. V. D. ハンセン『図説—古代ギリシアの戦い』、107頁参照。
- 90) ヘロドトス『歴史（中）』、巻6の115、307頁。
- 91) 同上、巻6の116、307頁。
- 92) 同上、巻6の116、308頁。

デモクラシーの危機

- 93) Victor Davis Hanson, *op.cit.*, p. 90. V. D. ハンセン『図説 古代ギリシアの戦い』、113頁。